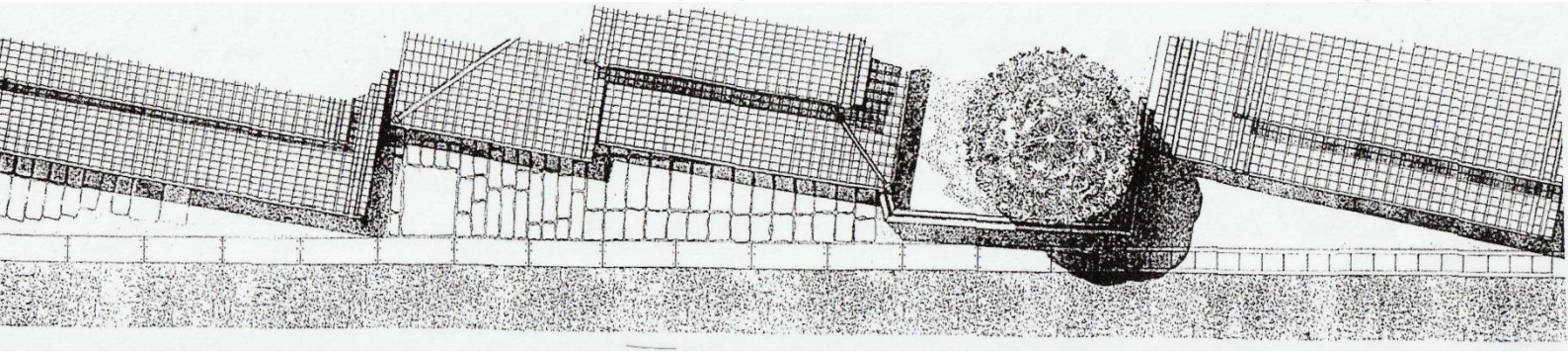
油長内蔵運営協議会企画

越ヶ谷蔵物語 第２章

2019年11月1日(金)～2020年1月31日(金)



イラスト右端が糀屋（明治大学理工学部建築学科 神代雄一郎研究室提供）

越ヶ谷宿越ヶ谷町は、南北に通じる日光街道（道中）を挟んで、 東西に「ウナギの寝床」のように短冊形土地割に店・住まい・蔵が立ち並ぶ賑やかな宿場であり、近隣の農村地域の中心地として栄えた町場でした。その越ヶ谷を長く見守ってきた蔵を通じて、越ヶ谷をもっとよく知りたいと、『越ヶ谷蔵物語』展を企画しました 。本年４月から５月にかけて開催した山﨑家油長内蔵の展示は大変ご好評いただきましたので、今回は第二章として都築家糀屋蔵に関する展示を三部構成で行います。

江戸時代も中頃から、従来の自給自足的傾向の社会が、それぞれの地の特産品を生産・販売する流通商品社会に変化してきました。越谷の市域は、勿論、米の大生産地でしたが、味噌と藁製品及び肥料としての藁灰などを特産品として、江戸や近郷村々へ移出していました。味噌は、越ヶ谷で３家、大相模で１家が醸造・販売していました。糀屋・都築家は、その一翼を担い、先祖代々、味噌の製造・販売を、その家業としてきました。味噌屋・都築家の蔵から、近世末期～近代の郷土史をのぞきます。

第１話では、醸造味噌屋としての糀屋・都築家の歴史を追います。米味噌地帯の東日本で、「田舎味噌」といわれながら、麦味噌を特産品とし、全国博覧会でも高い評価を得てきた越谷味噌の痕跡を見ます。また、現在の都築家は、明治３２年の越谷大火・「芋金火事」の火元・焼芋屋金次郎宅の跡地を買い求めて転居した地であることも新話題です。

第２話では、糀屋・都築家の文庫蔵がテーマです。蔵=土蔵は、そのほとんどが「土蔵造り」ですが、この蔵は「鐵筋混凝土造（現在の鉄筋コンクリート造に近い工法と思われる）」で、建築日は昭和初期を下らないといわれますが、当展示は大正６年建築説（従って、恐らく現存する越谷最古の洋式建築物）を主張します。また、越谷最古の青焼きと思われる、綺麗に保存されたこの蔵の設計図を公開します。

第３話では、糀屋・文庫蔵に残る、明治維新後・近代国家になって最初に出来た「越ヶ谷町」の地図（地引絵図）を展示します。これは、明治新政府の最初の大事業の１つである「地租改正」のために作られたもの。今までないとされていた、この当時の全越ヶ谷町の地図の公開です。併せて、地租改正関連品を展示します。

（油長内蔵運営協議会）

♦ 11/1（金）、11/5（火）、11/13（水）、11/21（木） 左記の日はガイドによる展示解説があります。
申し込み不要。 時間：14時～14時30分（11/1のみ11時～11時30分）
※第２話３話のガイド日はセンターＨＰでお知らせいたします。

♠ 11/17（日）10時～17時　都築家文庫蔵内が公開されます。お問合せ：油長内蔵（電話 080-9558-5821）